

## 記憶と継承 ～原爆ドームをめぐる～

元広島市長 平岡 敬 氏

2016 年 12 月 11 日 広島平和記念資料館メモリアルホール



原爆ドームが世界遺産に登録されて、20 年が経ちました。それを記念する催しが、広島ユネスコ協会によって開かれたことは大変意義深いことです。

原爆ドームの世界遺産登録の経緯とその意義については、1997 年 9 月に開かれた広島ユネスコ協会主催の講演会で私が話したことがあり、その記録が 1998 年 1 月 5 日発行の会報に載っていますので、読み返して頂ければ幸いです。

きょうは原爆ドームをめぐる、私の考えていることのいくつかをお話したい。

### 「歴史の証人」ドームを忘れるな 被爆者の怒りや憎しみの言葉は、原爆の非人道性を告発している

まず、「世界遺産登録 20 周年めでたし、めでたし」で終わってはならないということです。この機会に「何のために登録したのか」「何を記憶し、何を伝えていくのか」「原爆の被害はまだ続いている」ということを、もう一度考えてみたいと思います。

併せて、戦後、原爆ドームを撤去する話があったとき、折りづるの会の子どもたちや、白血病でなくなった楮山（かじやま）ヒロ子さんをはじめ多くの被爆者から、保存すべきだという声が上がったこと、さらに全国から多額の募金が集まったこと、そして世界遺産登録にあたって政治家をまき込んで、署名活動を中心とする広範な運動があったということ、思い起こさねばなりません。

こうした活動があって、広島の悲劇を記憶にとどめ、核廃絶を訴えるシンボルとして原爆ドームは世界遺産となったのです。そして人類のおかしたおろかな行為を忘れずに、人類の未来に警告を発し続ける「歴史の証人」となっているのです。

## 「ピカのことは遭うたもんじゃないとわからんよ」

### ～新聞記者時代、激しい言葉を浴びた

私は1952年（昭和27年）に中国新聞社に入りました。そして新聞記者の仕事として、原爆のもたらした現実に取り組んだのは1960年（昭和35年）、戦後15年たった頃です。1945年8月6日は外地にいたため原爆を体験していませんが、ピカの時の状況は親戚や友人、知人らから聞いていました。「お互い戦争ではひどい目に遭ったね」という思いの中での会話でした。それが記者として被爆者と向き合い、被爆体験を読者に伝えるという仕事をする事になりました。

戦後12年たって1957年（昭和32年）に原爆医療法ができましたが、国の援護策は充分ではありませんでした。朝鮮戦争後、ようやく経済成長へ向かいはじめた社会から取り残された被爆者も多く、結婚や就職差別がある中で、もがき苦しんでいました。

私は原爆投下から2カ月近く経った9月下旬に広島に帰ってきましたので、焼け跡は見ていますが、被爆時の地獄のような惨状は体験していません。私の筆力の至らなさもありますが、被爆者の話を文字にしても、なかなか話してくれた人の思い、感情を十分に表現することができないのです。

多くの被爆者から「あんたの書いたようなもんじゃない」「ピカのことは遭うたもんじゃないとわからん」とよく言われました。そして、自分の思いが伝わらないもどかしさから「もう一ぺん落ちりゃあ分かるんよ」とか「ゲンバクで亭主も殺されたし、わしも死にかけとらあ。何を言うてもどうにもなるもんかい。疲れるだけよ」とか「原爆をアメリカに落としてやりたい」とか、怒りを私にぶつけてきました。「あんたは記事を書いて給料をもらうのじゃろうが、わしらには何の足しにもならん。帰ってくれ」と怒鳴られたこともありました。

生活苦や社会の無理解など、彼らの置かれた状況が、このような絶望的な言葉を吐かせたと思いますが、被爆者の体験を聞くというのは辛い仕事でした。

こうした激しい言葉は、時が経つにつれて、聞くことが少なくなりました。原爆援護法ができたり、被爆者を包み込んだ平和運動が広がって、被爆者の苦悩に対する国民的理解が進んだり、また、時の経過が被爆者の怒りや苦しみや悲しみを和らげたのかも知れません。あるいは、70年代以降、「平和国家」の名の下に、被爆者個人の怒りや憎しみを押しづらくなっている状況が、影響しているのかも知れません。

かつて、被爆者の激しい言葉を聞いた私は、本当にそうなのか、という思いがしてならない。私が浴びたあの激しい言葉の中にこそ、被爆者の真実の声があり、原爆の非人道性を告発しているのだと思います。

## まんが『夕凧の街 桜の国』は

### 人間を無差別に殺傷し、苦しみ続ける原爆の本質をついている

もう一つ忘れてはならないのは、原爆で殺されていった死者の無念をどう受け止めるか、ということです。

広島・長崎に投下された原爆は、爆風、熱線、放射線などによって、無差別に市民を殺傷し、甚大な被害を与えましたが、72年たった今でも放射線による後障害が続いています。毎年、平和記念公園にある慰霊碑に納められている死没者名簿に、新しい名前が書き加えられています。その人たちは、天寿を全うして亡くなったのではなく、原爆によって殺

されたのです。

それを教えているのは、西区出身のまんが家の、この史代さんが描いた『夕風の街 桜の国』というまんがです。「夕風の街」は昭和 30 年代の広島市が舞台です。まだ、基町の川べりに「原爆スラム」と呼ばれていたバラックが密集し、広島カープの試合に市民が熱狂する時代です。

皆実という名前の主人公の女性は、原爆で生き残ったことの後ろめたさに責められていましたが、白血病と思われる病気で亡くなります。彼女は死の床でこう言うのです。

—10 年経ったけど、原爆を落とした人は、私を見て「やった！またひとり殺せた」とちやんと思ってくれとる？—

このことは老若男女を問わず無差別に殺傷し、戦争が終わった後も放射線によって、人間を苦しめ続け、死に至らせるという原爆の本質を見事に表現しています。

### 原爆体験は「核兵器は悪である」という概念を生み出した

戦中、戦後を生きた人々には、それぞれの戦争体験があります。それは戦場での体験、空襲体験、食糧難や学童疎開、勤労奉仕、防空演習や竹やり訓練、肉親の戦死、外地からの引揚げ体験など様々です。ただし、疎開、防空頭巾などの体験を伝えることばが、若い人たちには通じないところに体験継承の難しさがあります。

しかし、戦争が終わったとき、これらの体験者に共通する思いは「もう戦争はごめんだ。二度と戦争はしない」ということでした。中でも原爆体験は、人類初の体験であり、その強烈な印象は個々の被爆者の語りを通じて国民に共有され、その集積が国民的体験として結合され、「核兵器は悪である」という普遍的概念を生み出しました。

この思想に基づいて、広島は戦後一貫して核兵器廃絶、世界恒久平和の確立を世界に訴えてきました。その理想を具体的な形として体現しているのが原爆ドームです。

ドームを見ることによって、私たちは時間の経過に伴って、ともすれば薄れようとする記憶を呼びさまし、核と人間の問題に向き合います。その記憶は、被爆者の悲痛な叫び、彼らが生きた戦後、死者の声などです。

### ドームの世界遺産化へ、米国・中国は反対した

しかし、核時代の悲劇の象徴である原爆ドームに、私たちが認識しているような意義を認めない考え方があります。

1996 年 12 月、メキシコのメリダ市で開かれた世界遺産委員会で、原爆ドームを世界遺産に登録するかどうか、が審議されました。委員会を構成する 21 カ国のうち 19 カ国は賛成したのですが、2 カ国が反対しました。その 2 カ国とは、米国と中国です。

米国の反対理由は、次のようなものでした。

「米国はこの登録に賛成できない。原爆ドームの申請について、歴史認識が欠けているのではないかと米国は懸念している。第二次世界大戦を終わらせるために、米国が原爆を使用した。その前段階で、いったい何があったか、それを理解することが、広島悲劇を理解するカギになる。1945 年に至る時期のどのような検証も、歴史の正しい前後関係の中でなされるべきだ。米国は、戦争遺跡の登録が、世界遺産条約の範囲外にあると考える」

米国は、これまで一貫して「原爆は戦争を終わらせるために使った。これは正当な行為で、

これによって多くの生命が救われた」と主張してきました。「戦争を終わらせるため」という理由は、今でも多くの米国人が信じていますが、米国人にとっても、誰が考えても、残虐な原子爆弾を投下した非人道的行為の証拠が世界遺産として残ることは、耐えがたいことであつたでしょう。

また、中国代表は、「第二次世界大戦で、アジアでほかにも生命や財産を失って苦しんだ数多くの人々がいる。しかし、今日に至ってもまだ、この事実を認めようとしない人々がいる。今回の広島登録は、たとえ登録の要件に当てはまるとしても、この種の人々が、登録を危険な目的のために利用することがあり得るかもしれない。こういう事態は、世界の平和と安全につながらないと考えるので、我々は今回の決定からはずれる」と言って棄権しました。

中国は、日本の一部政治家の言動をとらえ、日本は原爆被害を免罪符にして、アジアの人たちへの加害責任を免れようとしているのではないかと考えたのです。

米国も中国も、力点は違うものの、日本の「歴史認識」を問題にしたのです。歴史認識とは、あの戦争はなんだつたのか、戦後の歩みをどう位置づけるか、ということです。

### なぜ今なお、「歴史認識」が問われるのか

「歴史認識」の問題が突きつけられるのは、日本が国として、また日本人一人ひとりが、戦争責任とか歴史認識について、真正面から取り組んでこなかったからではないでしょうか。

先の戦争をどう呼ぶのか。第二次世界大戦、太平洋戦争、十五年戦争、大東亜戦争。私はアジア・太平洋戦争という言い方が、一番事実即していると思っていますが、様々な言い方があるということは、それぞれの歴史観によって、呼び方が異なるということです。つまり、国民の間に統一した呼称が定まっていないので、「先の大戦」と言っています。

これは、日本が戦争責任の問題を極東軍事法廷にまかせて、自らの課題として追及せず、すべてをあいまいにしてきたため、正しい歴史認識ができていないからでしょう。

原爆ドームは単なる戦争遺跡ではなく、私たちの歴史認識のあり方を考えさせ、鍛える存在でもあります。

### 原爆投下の責任を明らかにすることは、核兵器禁止へ進む第一歩

さて、アメリカではトランプ氏が大統領になることが決まりました。

まだ彼の政策がよくわかりませんが、軽々には論評できませんが、今のところ、核兵器や世界の核状況に関して強い関心を持っているようには感じられません。選挙演説で、日本や韓国の核武装を容認するような発言をしていただけに、トランプ氏の真意が気になります。

オバマ大統領は、核問題を重要と考え、核兵器の拡散を防ぐことに力を入れていました。2009年春、プラハでの演説で「核のない世界」をつくろうと訴え、今年5月、広島でも「核なき世界を追求する勇気を持たなければならない」と言いました。

しかし、一方で、「私の生きている間に、この目標は実現できないかもしれない」と逃げ道をつくり、「核抑止力」を維持するだけでなく、さらに、核兵器の近代化を進めるために、今後100兆円を超える予算を組みました。

オバマ大統領の広島演説は、「71年前、明るく雲一つない朝、死が空から降り、世界が変わってしまった」と言う言葉で始まりました。原爆攻撃をまるで自然現象のように表現しま

した。誰が落とされたのか、を言いませんでした。つまり、投下責任に触れることを避けました。この言葉を、無惨に殺された死者は、どう聞いたでしょうか。死者に口がきければ、「原爆を落とされたことをどう思うか」と大統領に質したに違いありません。

日本政府は、オバマ大統領を招くにあって、「謝罪を求めない」と保障し、広島県知事、広島市長も同じことを言い、とにかく広島に来ることを求めました。もちろん謝罪を求めても、米国が謝罪をするはずはありません。「戦争を早く終わらせるため」とか「多くの米兵や日本人の生命を救った」と正当化するのは、そうでもしなければ、広島・長崎の惨劇を正視することができないからです。

しかし私は、米国は原爆使用の過ちを認めるべきだと考えています。原爆投下の責任を明らかにすることが、核兵器禁止へ進む第一歩だからです。このことを曖昧にしたままでは、核兵器禁止の理論的根拠が失われるからです。「謝罪を求めない」とは、こちらが言うことではありません。米国が苦しみ、悩み、自らが考えることです。

### 米国の国益を優先させるオバマ大統領の核政策

オバマ大統領は演説が上手です。プラハ演説を聞いたとき、私たちは、米国が先頭に立って核廃絶に向かえば、広島が求めている「核のない世界」が実現するだろう、という明るい希望を持ちました。

しかし、その年の秋、オバマ大統領が新しい予算をつくった時、核兵器関連予算がブッシュ大統領の時の予算に比べて、13%もアップしていることが分かり、私はオバマ政権の核政策を楽観しませんでした。彼の真意は、核拡散を防ぐことにあり、核を手放そうとは考えていなかったからです。彼は米国の国益を優先していますが、ヒロシマは国の立場を超えて人類の生存を守るべく核兵器廃絶を訴えているのです。

オバマ大統領は、核のない世界をつくろうと努力しているが、米国内の状況、軍産複合体や保守勢力がそれを阻んでいるのだ、という好意的な見方をする人もいますが、政治家は言っただけではダメ。政治家の言葉は実らなければ、ただの作文にすぎません。せっかく広島に来たのに、原爆資料館をのぞいたのがたった10分ということが、彼の広島訪問のねらいを明らかにしていると思います。

それでも、オバマ大統領の広島訪問を評価する声がありますが、私は米国が原爆投下の責任を認めない限り、核兵器の廃絶はできないと思っています。そして、米国の軍事、外交政策について知れば知るほど、さらに、原爆投下を決定した当時の国際情勢や、ルーズベルトやトルーマンの対日観、また様々な米国関係者の当時の発言などを知れば知るほど、オバマ大統領の広島訪問を素直に評価できなくなります。

オバマ大統領の人間性に不快感を覚えたことがあります。2001年9月11日に起こった米国同時多発テロの首謀者とみなされたウーサマ・ビンラディンが、2011年5月に米海軍特殊部隊によって射殺された時、オバマ大統領とヒラリー国務長官が手を打って喜んでる映像が流れました。法治国のリーダーの取る行動ではありません。裁判をしないで、人権への配慮なしに、口をふさいだのではないかとの疑問が湧いてきます。

私は、平和公園でオバマ大統領が演説した後、松井広島市長が平和への市民の思いを語るべきであった、と思います。そうすれば、オバマ大統領の「核のない世界」という訴えが、より強く世界に印象づけられたでしょう。

残念ながら、核廃絶に熱心であるとは思えない安倍首相が長々としゃべったため、オバマ大統領の広島訪問は、日米両首脳のパフォーマンスになってしまったと思います。

### 安倍首相の真珠湾訪問は政治ショーになりかねない

そして、またもや、政治ショーが始まりそうです。安倍首相は5日夕方、今月26日、27日に米国ハワイを訪問する、と発表しました。1941年12月8日の真珠湾攻撃の犠牲者の慰霊と日米同盟の強化、日米和解の価値を発信する機会にしたいとのこと。

この真珠湾訪問は、オバマ大統領の広島訪問の返礼だ、という見方もありますが、私は、次期大統領に決まったトランプ氏にあわてて会いに行ったことに、オバマをはじめ米国政府首脳が不快感を示したことや、ロシアとの会談を快く思っていないことなど、米国側の安倍不信を払拭するねらいがあったのではないかと、思っています。

同時に、北朝鮮の拉致問題やロシアとの北方領土問題が進展せず、TPPも漂流中です。さらに、アベノミクスも失敗で、いまや原発輸出、武器輸出、カジノ解禁で景気浮揚を図ろうという国民不在の経済政策をせざるをえないほどの行きづまりを隠すための政治ショーではないか、という思いがぬぐいきれません。真珠湾で話題をさらい、安倍政権の失政を糊塗しようとしているとの観測も出ています。

### 日本も戦争被害だけでなく

#### アジアへの謝罪と加害責任の記憶を忘れてはならない

オバマ大統領は、広島に来て原爆投下について謝罪しませんでした。安倍首相も謝罪はしないということです。お互い反省はなく、慰霊の形を借りて、同盟強化の政治ショーを繰り返すのは、死者への冒瀆です。

和解は、お互いに過ちを認めることから始まります。反省なくして、和解できません。

不平等な日米安保条約・地位協定、沖縄の基地問題、原爆投下責任の問題などを放置したまま、和解をうたうのは、日本の米国従属の一層の固定化につながります。とくに、アジアとの和解を置き去りにしていることが問題です。

中国敵視政策を続けながら、安倍総理はハワイ訪問談話の中で、「日米は世界の平和と繁栄のために共に汗を流してきた」などと言っているのは、欺瞞です。そもそも、原爆投下と真珠湾攻撃は次元の異なる話です。

真珠湾攻撃は軍事目標をねらった攻撃ですが、広島・長崎への原爆攻撃は、無差別に非戦闘員を殺傷し、放射線の後障害がいつまでも続くという、国際法に違反する非人道的行為です。真珠湾と広島は、相殺できる話ではありません。「未来志向」という言葉や日米の相互訪問で、原爆投下責任と日本の戦争責任の問題をうやむやにしてはなりません。

オバマ大統領の広島訪問が具体化したとき、「謝罪を求めないのは良いことだ」といわんばかりの空気が広がりました。私は度量が狭いのでしょうか？生き残った者、いま安穏な生活を享受している者が、死者の思いをさしおいて、「謝罪を求めない」という言葉を口にすることに、違和感を覚えました。

近年、広島では「平和」の名の下に、被爆者個人の怒りや恨みを表に出しづらくなっているように思います。言いたくても言えない空気があります。

私たち自身が、「核兵器廃絶の願い」と「核の傘に依存する」ことに矛盾を感じながら、

平和・安全保障にかかわる根本問題との対決を先送りしているところに、被爆者が自らの感情を素直に出しにくい状況が生まれているように思います。日本被団協は、2001年に「21世紀被爆者宣言」で米国の謝罪を求めています。そのような声は歓迎ムードの中に埋もれてしまいました。

私たちは核問題について、建前だけで話すのではなく、人間的な感情を取り戻して向き合うべきでしょう。

情念的な怒りや恨みを忘れては、核廃絶への訴えは観念的なものになってしまいます。被爆者が次第に姿を消して行くときだけに、特にそう思います。そして、米国の謝罪の問題は、次世代の人たちにとって、大切な被爆体験の継承です。

しかし、この場合、日本もアジア・太平洋戦争で多くの国際法違反の過ちを重ねていることを、思い出さなければなりません。つまり、被害だけではなく、加害の責任も記憶に留めておきたいとします。アジアへの謝罪がない限り、戦後は終わらない。

私たち日本人は、広島・長崎の体験を国民的体験とし、戦争の記憶として心に刻んでいますが、戦争の記憶は国によって違います。米国は、日本の真珠湾攻撃をいつまでも覚えており、中国は、南京での日本軍の虐殺を忘れません。

日本が加害者となった戦争の記憶は、決して愉快なものではありませんが、未来を切り開くためには、原爆の記憶と同様に忘れてはならないものでしょう。自分たちの過ちを認めつつ、他人の罪を問うのは大変むずかしいことですが、二度と核兵器を使わせないためにも、しなければならないことです。

現在、世界には1万5,000発の核兵器が存在し、中東、ウクライナ、北東アジアなどでは、核戦争を誘発しかねないような緊張が高まっています。

しかし、核兵器を禁止しようという動きは確実に高まっています。国連では、この10月「核兵器禁止交渉の会議を2017年に開催する決議」を123カ国が賛成して採択しました。

核兵器廃絶に向けての大きな一歩です。

ところが、日本は核の傘に依存し続けるため、米国に追随して反対しました。これまで日本は、核兵器保有国と非核兵器国との橋渡しをする、と度々言ってきましたが、実際にはいつも核兵器保有国の側に立って、米国の代弁ばかりしてきました。

今回は、議決には反対したが、交渉には参加する、ということです。矛盾した行動ですから、もしかすると、米国の代理人として、交渉の進展を邪魔する役割を果たすのではないかと心配になります。

ここは私たちが、国の動きをしっかりと監視しなければならないところです。

## **体験の継承は、資料の保存と並んで音楽、文学、演劇などの芸術文化の形をとることが望ましい**

私はかつて、私たちの課題として二つのことを言ってきました。

①被爆体験の継承      ②ヒロシマの思想化

被爆者が老い、その数がだんだん少なくなってゆく今、被爆体験の継承とは何か、を考えなければなりません。

被爆者の苦悩に寄り添いながら、被爆体験を研究対象としている広島市立大学平和研究所教授の直野章子さんは、その著書の中で、「被爆体験の継承」というときの「被爆体験」と

は、被爆者が「再び被爆者をつくらない」という信念を導き出した体験を指す言葉だと述べています。

継承されるべき「被爆体験」は、被爆者と被爆者と共に生きた者との共同作業によって作り出されたものであり、継承とは、その理念を次の世代へ引き継ぐことを指すという説に、私は同感します。〈直野章子『原爆体験と戦後日本』(岩波書店)より〉

被爆者の証言に依存するだけでは、被爆体験の継承はいずれ立ちゆかなくなります。

先にお話した、こうの史代さんの描いたまんが『夕風の街 桜の国』は、映画にもなり、様々な人に鑑賞されました。中沢啓治さんが描いた『はだしのゲン』は、英語などいくつもの言語に翻訳され、多くの人たちに読まれています。

私は、ヒロシマの体験の継承は、平和記念資料館の被爆資料の保存と並んで、音楽、文学、演劇、絵画、映像といった芸術文化の形をとることが最も適していると思いますが、「原爆ドーム」は慰霊、平和祈念、核廃絶への願いをベースに、そのすべてを包み込み、体現した遺跡だと考えています。

体験が結晶して、思想や精神になったとき、それは世代の谷間を越えて行きます。それだからこそ、体験の風化は避けられないことであっても、原爆ドームを保存する意思を堅持しつつ、私たちは戦争、原爆の記憶を語りついでいかねばならないのです。建造物を保存することが、自己目的化してはなりません。

被害、加害の戦争体験を語りうる世代は、いずれこの世から退場します。同時に、戦争、原爆の記憶が総体として、薄らいでゆくという現実があります。「戦争はゴメンだ」という声も弱くなりました。

一方で「戦後」を否定する保守主義の台頭もあって、体験や記憶といったものから自由になって、戦争とか戦後を考えようとする傾向が見られます。さらに、核武装論が公然と論じられるようになった。これはヒロシマの試練です。

過去を忘れ、過ぎ去った時間を捨てて行く。それは時には、生きていくための智恵として避けられないことであり、また必要なことでもあり、私たち人間が常々繰り返し行ってきたことです。

したがって、記憶するという営みは、決して自然な行為ではなく、努力が必要です。若い世代が、生まれる前の経験したこともない事柄について、記憶の伝承を引き継いでいくことには、大きな困難が付きまといまいます。

忘却が当たり前の人間の日々の営みの中に、忘れたくても忘れることのできない、いや、決して忘れてはならない記憶があります。その記憶に向き合うには学びの姿勢が必要で、原爆ドームは、私たちにその努力を促しています。

### 原爆ドームを単なる観光資源にしてはならない

近年、広島観光客がふえています。原爆ドーム、厳島神社という世界遺産があるからでしょう。原爆ドームは、保存のため補強工事が施され、昔の生々しさがなくなりました。周囲の景観も整備されています。

しかし、原爆ドームを単なるモニュメントとして、また観光資源として捉えていると、原爆体験だけではなく、戦争の記憶、加害の自覚、原爆投下責任の追及といった問題を隠してしまいます。

ドーム付近のイルミネーションが新聞記事になったので、見に行きました。私は疑問を抱きました。なぜイルミネーションが必要なのか、飾ることの意味は何なのか、ということです。電飾は原爆の残虐性を見えなくする役割を果たすことになるのではないのでしょうか。

原爆がもたらした罪悪を永遠に思い起させる原爆ドームを通じて、今の世界の核状況に思いを馳せ、原発や日本の安全保障のあり方を考えることが大切です。そして原爆ドームが存在する限り、米国の原爆投下正当論は正当性を失い、やがて米国の世論も変わるに違いありません。現に米国の世論調査では、「原爆投下は過ちだった」という意見が、次第にふえてきています。

原爆ドーム世界遺産登録 20 周年を機に、ヒロシマ以後を生きる私たちは、被爆者の胸の底に秘められた情念と、死者の無念を思い起こすとともに、原爆の非人道性を世界に訴え、その行為の責任を問いつける義務があることを確認して、私の話を終わります。



【略歴】 ひらおか・たかし 1927年12月21日、大阪市生まれ。旧制広島高等学校を経て早稲田大学第一文学部卒業後、中国新聞社へ入社。被爆後、新聞記者として広島を駆け巡った。その後、同新聞社の常務取締役編集局長を経て、中国放送代表取締役社長を務めるなど、報道機関の要職を歴任。1991年2月に行われた広島市長選挙で初当選。2期8年（1991年～1998年まで）広島市長を務めた。市長在任中に、世界平和のシンボル・原爆ドームのユネスコ世界遺産に尽力、1996年に念願の遺産登録を実現した。